



“Informal Education”

Graduate School of Human Development & Environment Kobe University

台湾公園運動実施者調査 (台湾、台北市) 報告書

日 程

2008年8月30日(土)～9月3日(水)

参加者

山口 泰雄 (人間発達環境学研究科教授)
秋吉 遼子 (人間発達環境学研究科博士課程後期課程1年)
常行 泰子 (人間発達環境学研究科博士課程後期課程1年)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
2008

目 次

◆ 訪問スケジュール	… p.3
◆ 活動全般報告	… p.4
◆ 大学院 GP 活動報告書（秋吉）	… p.5
◆ 大学院 GP 活動報告書（常行）	… p.6
◆ 調査概要	… p.7
◆ スポーツクラブ事例報告	… p.8
Appendix 1 圓山公園写真	… p.9
Appendix 2 大安森林公園写真	… p.11
Appendix 3 調査チーム写真	… p.13
総括	… p.14

訪問スケジュール

8月30日（土）

午前、関西国際空港発

午後、台北空港着、ホテルへ

台湾師範大学の Hank 教授、Keh 教授と調査打ち合わせ

↓

8月31日（日）

台北市圓山公園を調査

↓

9月1日（月）

台北市大安森林公園を調査

↓

9月2日（火）

台湾内の他の公園にてフィールドワーク

↓

9月3日（水）

午後、台北空港発

夜、関西国際空港着、解散

正課外活動報告（全般）

活動の概要

台湾台北市における圓山公園と大安森林公園の調査を行い、台湾での公園運動実施状況について正課外活動を行った。公園運動実施者は、日本や中国系住民だけでなく、韓国やフィリピンの都市部近郊公園においても、多くに市民がハイキングやウォーキング・体操を実践しており、アジア特有の文化とされている。今回は、公園運動実施者の運動ステージとクオリティ・オブ・ライフに及ぼす要因モデルを構築し、日本、台湾におけるフィールドワークにより仮説モデルの妥当性を検証し、運動ステージにある非実施者と公園運動実施者のプロフィールと特徴を明らかにすることを目的とした。なお、訪問したのは、人間発達環境学研究科人間行動論講座の山口泰雄教授、秋吉遼子（山口研究室 D1）、常行泰子（山口研究室 D1）の 3 名である。

これまでの経緯と訪問の準備

これまで「ソウルにおけるハイキング・山登りの研究」（朴、山口：2007）、「中国における公園運動実施者の社会化研究」（李、山口：2006）などの予備的調査を行ってきた。さらに、フィールドワークを行うための事前調査を済ませており、分析のためのソフトウェアや測定機器のチェックも行った。台北市における中高齢者の公園運動実施者マップなども作成している。研究代表者のゼミには、中国からの大学院生が在籍しており、通訳や翻訳の体制がある。

また、研究協力者とは、過去 8 年間、TAFISA（国際スポーツ・フォー・オール協会）コンGRESSや ASFAA（アジア・オセアニア・スポーツ・フォー・オール協会）コンGRESSにおいて、研究テーマに関する意見交換を行い、2007 年 9 月に開催された TAFISA コンGRESSで実施に向けて協力体制が確立された。台湾において、高齢の公園運動実施者の研究を発表してきた台湾師範大学教授の Jwo, H と Feng, M、さらに台湾五輪委員会名誉会長（Fen, W.L.）の協力支援が約束されている。研究者間でメール等々を通じて英語のコミュニケーションが可能であり、言語の対等性や尺度の対等性を考慮しながら、各国において、確実なデータ収集と分析が可能である。

【文責 常行】

大学院 GP 活動報告

秋吉遼子（人間発達環境学研究所人間行動専攻博士課程後期課程1年）

「貴重な経験」。これが率直な感想である。今日まで国内においては、スポーツ施設の利用者やスポーツイベントの参加者に対して調査を行ったことはあったが、海外で調査を行うことは今回が初めてであったため、渡航前の準備時にとっても緊張したのを覚えている。調査票の測定・言語の対等性や概念の対等性等を維持するため、再翻訳（back translation）を行った上、研究協力者である台湾師範大学の Jwo H. 教授に調査票のデータを送り、再度目を通していただき加筆修正をしてもらった。この調査準備の段階で、国内の調査との違いを実感した。

台湾に渡って2日目と3日目に行った圓山公園ならびに大安森林公園の質問紙調査では、原則として、日本人研究者1名、台湾人研究者1名の2名1グループの合計3グループにより、両公園において各グループの調査範囲を調査前に決めた。これにより、両公園とも地理的に全体を網羅できたと考えられる。両公園の特徴について詳細に述べることは、紙面の関係上、省かせていただくが、公園運動を普及させるために両公園は造られたという点は特筆すべき点であろう。その両公園の公園運動実施者のうち、特に高齢者は、昔日本が統治していたため、日本語を話すことができる人が散見された。そして、台湾のインフラを日本軍が整備したこと等の歴史的な背景が影響してか、積極的に調査に協力してくださる方もいた。2日目の圓山公園での調査では、衰退しているような団体が多い中、私がいたグループは、とても活性化している団体に調査することができた。その団体の代表の女性はとても人格者であり、私たちに代わって団体のメンバーに調査の依頼をしてくれる程の人であった。今日わが国においても、総合型地域スポーツクラブにおいて優秀な人材の重要性が叫ばれており、通ずるものがあると感じた。

初めての海外での調査であったにも拘らず、大きな問題もなく、無事終えることができたのは、台湾師範大学の Jwo H. 教授、Chin K. 教授、また両先生の研究室に所属している3名の院生、加えて約200名もの調査にご協力してくださった台湾の公園運動実施者の方々のおかげである。早朝から公園にきて、元気よく運動をしていた方々のいきいきとした顔は、日時が経った今も鮮明に覚えている。私は調査した側であるにも拘らず、調査対象である公園運動実施者から元気をいただき、刺激を受けた。この貴重な経験を、経験で終わらすことなく、今後のきっかけとし精進していこうと思う。

最後になりましたが、本調査にご協力、ご尽力いただいた皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

大学院 GP 活動報告

常行泰子（人間発達環境学研究所人間行動専攻博士課程後期課程1年）

台北に到着した初日、初対面である Hank 教授と Keh 教授に対面した。国外の研究に初めて参加させていただいた今回の訪問では、たいへんな緊張とプレッシャーを感じていたが、両氏の温かい歓迎に心から安堵し、今後の研究がスムーズに進行していく予感を感じることができた。両氏とも英語がたいへん堪能であり、かつ米国で博士号を取得されたご経歴のためか、非常にフレンドリーに接していただき、温かい心配りをしていただいた。面会した際にはすでに調査場所や調査の進行について熟知しておられ、我々に熱く、かつ詳細な情報を提供してくださった。事前に得ていた我々の情報を共有することで、明日開始する調査についてのイメージトレーニングが十分に行うことができたと考えられる。

2日目と3日目は、台北市が運動実施者を増加させる意図で設立された円山公園と都市部にある大安公園でのインタビュー調査をおこなった。Hank 教授と Keh 教授の教え子であり、台湾師範大学の学生である3名の協力を得てインタビューを開始した。2日目に調査を実施した円山公園においては、公園そのものに起伏がある特異な形状をしており、ハード面からみて非常に興味深い調査場所であったと思われる。3日目に調査を実施した大安公園においては、利便性の高い都市部の公園ということもあり、比較的中流以上の富裕層が多くみられた。リハビリ用のバーが設置してあるなど先進的な設備も備わっており、健康づくりに有用となる運動を実施するのに適した環境が整えられていると感じた。

また種目に関しては、太極拳や気功など中国独特の文化が運動実施にも反映されていた。また、日本の中高齢者に多い水泳実施者がほとんどみられないなど、興味深い相違点も明らかになった。山口教授の研究で示唆されているように、国際比較研究においては、相違点と類似点を明らかにすることだけでは不足があり、そこからさらに1歩踏み込んで分析を行うことが重要であると考えられる。そういった面から、今回は台湾まで実際に足を踏み入れ、自ら現地でインタビュー調査を行う機会を得られたことは、より深い分析を行い、従来の先行研究よりも、より密度の濃い考察を行うことが可能になったと思われる。

現地の研究者と共同して研究を進めていくことは、我々日本人が従来持つ常識以外に、他国の文化を理解し、国際社会に適合していくスキルが必要であることを痛感した。まず第1に言葉の壁、さらに習慣や風習の違い、また意思疎通の面など「体感」することは本当に貴重な機会であると考えられる。その貴重な機会を与えてくださった教授、そして大学の関係者の方々に改めて感謝し、御礼申し上げる次第です。今回の貴重な研究成果を社会に還元していくためにも、今後の分析と考察をさらに研究チームで深めていくことができるよう尽力してきたいと考えております。

調査概要

1. 調査目的

本研究の目的は、台湾の公園運動実施者の運動ステージとクオリティ・オブ・ライフに及ぼす要因モデルを構築し、日本、台湾におけるフィールドワークにより仮説モデルの妥当性を検証し、運動ステージにある非実施者と公園運動実施者のプロフィールと特徴を明らかにすることである。

2. 調査内容

要因	項目	カテゴリー
属性	回答者の属性	1. 性別 2. 年齢 3. 身長 4. 体重 5. 参加形態 6. 世帯構成 7. 職業
公園運動実施状況	公園運動実施頻度	1. ほとんど毎日 2. 週に数回 3. 週に1回程度 4. 月に1回程度 5. 年に数回 6. 年に1回程度 7. 全くなし
健康行動	健康のために実施していること	1. 食生活や栄養バランス 2. 運動 3. 体を動かす 4. 睡眠 5. ストレス 6. 仕事 7. 健康チェック 8. 酒 9. タバコ 10. 身体を清潔 11. 部屋の清掃 12. 生活 13. イベントや活動に参加 14. その他 15. 特になし
歩行時間	1日の歩行時間	1. 30分未満 2. 30分～1時間未満 3. 1時間～1時間30分未満 4. 1時間30分～2時間未満 5. 2時間以上
ソーシャル・サポート	運動をする際、適切な指導者がいる 運動に参加するために家族が支援してくれる 運動に参加するために友人が支援してくれる 身近に、運動に誘ってくれる仲間がいる	1. あてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. 少しあてはまる 4. あてはまる
運動ステージ	運動ステージ	1. 現在、運動しておらず、今後6ヶ月以内に始めるつもりもない 2. 現在、運動をしていないが、今後6ヶ月以内に始めようと思って 3. 現在、運動をしているが、定期的ではない 4. 定期的な運動を過去6ヶ月以内に始めた 5. 定期的な運動を6ヶ月以上継続して行っている
自己効力感	少し疲れているときでも、運動する自信がある あまり気分がのらないときでも、運動する自信がある 忙しくて時間がないときでも、運動する自信がある あまり天気がよくないときでも、運動する自信がある	1. 全くそう思わない 2. あまりそう思わない 3. 少しそう思う 4. かなりそう思う
健康自己評価	他人との健康状態の比較	1. 劣っている 2. 少し劣っている 3. 少し優れている 4. 優れている
QOL	家族との人間関係 友人や仲間との人間関係 余暇におこなう活動 現在の生活環境 生活における経済的側面 現在の健康状態 現在の生活全体	1. 満足している 2. まあ満足している 3. あまり満足していない 4. 満足していない

3. 調査対象

台湾の台北市の公園運動実施者

4. 調査方法

2008年8月31日に台北市内の圓山公園、および9月1日に大安森林公園の公園運動実施者に対し、質問紙調査を実施した。

5. 回収数

198票

スポーツクラブ事例報告

8月31日に調査を行った圓山公園において、衰退しているクラブが多い中、敷地が広く、会員も多く、活性化しているクラブがあった。そのクラブの様子を簡単ではあるが、ハードとヒューマンという2つの視点から、なぜ本クラブが他の団体と比べ活性化しているのかという考察を加えながら報告しようと思う。

本クラブは、約200名の会員が所属しており、会費は永久会員と一般会員で異なる。段々畑のような地形をしている圓山公園において、本クラブは3段スペースを有しており、1段目は広いスペースと炊事場等を含んだ食事スペース、2段目と3段目は筋トレ用の機器が備えてあった。このように、ハード面において特筆すべき点は、設備が充実していることである。筋トレ用の機器、炊事場、食卓、カラオケセット等、運動・スポーツを行うことを目的とした機器以外のものも完備されていた。そのため、この団体を訪れた際、運動・スポーツを行っている人より、家族と過ごすかのようにリラックスして、おしゃべりをしたり、食事をしたり、カラオケをしたりして過ごす人の姿が多くみられた。また、朝食を一緒に食べている姿も見られた。



ヒューマンに関しては、本クラブの代表の女性が、国際的な民間社会奉仕団体であるライオンズクラブの代表であったこともあり、とても人格者であった。見ず



知らずの私たちを自分たちのクラブのスペースに好意的に招き入れてくれ、日本語で質問をしても日本語で丁寧に返答をしてくださった。また、クラブの事務所のような部屋も見せていただいた。本クラブのどの会員にも気軽に話しかけ、お茶やお菓子を振る舞っており、若い会員からの人望もあついようであった。決して社交辞令ではない「また来てね」という温かい言葉にとっても感動し、この女性がいる限り、活性化したまま本クラブは存続するであろうと感じた。

【文責 秋吉】

Appendix 1 圓山公園写真



圓山公園入り口



調査風景



バドミントンコート



公園内で野菜などを売る人たち

Appendix 2 大安森林公園写真



公園案内板



調查風景



公園風景



団体で運動している様子

Appendix 3 調査チーム写真



Hank 教授（右から 3 人目）と Keh 教授（右端）

統 括

今回、GP 活動の一環として台北市の圓山公園と大安森林公園で質問紙調査ならびにインタビュー調査を行い、公園運動実施者の特性分析と台湾の運動・スポーツ実施状況について研究をさせていただきました。研究者の方々と交流を深め、さらに現地の人々の詳細な運動・スポーツ実施状況を把握することができたことは本当に意義の深いことであった。

これは、人間行動論講座の山口教授が台湾師範大学の Hank 教授と長年に渡る親交を温めてこられたこそであり、身近にいた我々においても他国の研究者とのつながりの重要性を再認識することができた。今後は、海外の院生も含めた研究者との情報交換、さらに共同研究へと発展させる必要性を感じている。

異文化への理解を深め、さらに我が国に対する他国の理解を深めるためにも、研究を通じた国際貢献は可能であると考えられる。海外調査を実際に行い、体感した貴重な経験が今後の研究生活に有用となるよう邁進する次第である。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった大学院 GP の皆様に、参加者一同、感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

【編集協力者 稲葉慎太郎（人間発達環境学研究科博士課程前期課程 2 年）】